

## 長崎にゆかりのある作家大泉黒石

向井 十郎

大正文壇に彗星の如く現われ、彗星の如く消えて行った大泉黒石の文学と、数奇な運命の遍歴を辿りながら、長崎物の小説にふれて見る。

最近、私が読んだ小説の中に、長崎を舞台にして書かれた幾冊かの小説がある。それらの中には、純文学的な小説もあるが、長崎物と言われて来たものに、作中の歴史的な背景はそれぞれ違うが、長崎にゆかりのある作家、大泉黒石の大衆小説がある。

この作家については、この地にゆかりのある作家にしては、あまり県内で知る人は少ない。一九八八年三月二十五日造型社で発行された、大泉黒石全集が手許にあるので、黒石の研究には大変役に立っている。以前から私は、長崎を背景にして書かれた小説を集めているが中でも最近興味を抱いて読み返して見たのは、大泉黒石の長崎物の小説である。その一つに「黄夫人の手」という短編は、現代のミステリー小説や、幻想的な小説を読むような面白さがある。



前列左から永見徳太郎夫人、古賀十二郎、大泉黒石、武藤長蔵、永見徳太郎、後列左はオランダ人船長。大正12年2月のこと。

この小説が発表されたのは、大正十三年で、その頃の長崎の状況を舞台にして、新地という特殊な居留街の周辺に起る奇怪な事件を設定して小説にしたものであるが、その素材については、おそらく中国にあった一つの出来事からとったものようである。この作品は、当時の長崎新地の風物を冒頭に説明しながら、奇怪な事件へ導いていくのである。こゝにその冒頭の部分の描写を抜き書きし、作者の文体と呼吸にふれて見たい。

この小説が発表されたのは、大正十三年で、その頃の長崎の状況を舞台にして、新地という特殊な居留街の周辺に起る奇怪な事件を設定して小説にしたものであるが、その素材については、おそらく中国にあった一つの出来事からとったものようである。この作品は、当時の長崎新地の風物を冒頭に説明しながら、奇怪な事件へ導いていくのである。こゝにその冒頭の部分の描写を抜き書きし、作者の文体と呼吸にふれて見たい。

その他、若い男女の初恋と別離を描いた数奇な「心癡狂」あるいは不義を働いた自分の妹を料理する「人間料理」と、それぞれ黒石の特色を遺憾なく発揮した作品が収録されている。

これらの中で「黄夫人の手」は秀作として面白い。黒石文学を大きく分けると、「1」自伝物・「2」中国物・「3」長崎物・「4」江戸物（世話物）・「5」ロシア物・「6」怪物物・「7」紀行物の七種類に分類されるが、前掲のものは、「2」「3」「6」に含まれるものである。

ここで、多くの他の作品にふれる前に、大泉黒石というこの作家の生い立ちにふれて見たいと思う。その生い立ち、文学、そして人生の遍歴については、昭和四十六年二月号の「九州人」の誌上に「大泉黒石の文学と周辺」と言う一文を筆者、志村有弘（立教大学出身の文学博士）という人が論じている。その後、昭和五十二年四月三十日に、笠間書院より、「近代作家と古典―歴史文学の展開」の選書の中で、同じ筆者による「大泉黒石の文学と周辺」で詳しくふれている。

外に、昭和十年に長崎高商に学生生活を送った島尾敏雄の黒石論も黒石の世界を語って詳しい。更に、一九八八年三月二十五日発行の「大泉黒石全集」（造形社発行）は、研究会による詳しい資料の収集によって黒石の全貌が明らかになっている。

それらの資料によれば、黒石の代表作の一つといわれる自伝的小説「俺の自叙伝」や「放浪の半生」の中に、彼自身が明かした自分史がある。そうした資料を総合してみると、彼は明治二十六年十月二十一日に長崎市八幡町八番戸（八幡神社の境内）に生まれ、一週間後に母は死んでいる。母・本川恵子は明治十一年に生れ黒石を産んだ後十六才で没している。母方の祖父は、下関の最初の税関長を勤めた人物と云い、明治維新となつて「賄賂」を取つたという風評をたてられ、長州の山村の山寺で自殺したという。黒石の父は、アレキサンドレ・ステパノウキッチ・ワホヴィッチと言いつロシア農家に生れ、ペテログラード大学出身の法学博士、天津及び漢口の領事で、明治三十四年没す。黒石九才の頃であつたと記してある。

ワホヴィッチは政治的用務を帯びてニコライ皇太子に随伴したロシアの皇族達と共に長崎へ来たとき、長崎の町から選ばれた接待役の婦人で、ロシア語を勉強し、ロシア文学に明るかつた女性と知り合い翌月結婚、黒石は十才まで長崎の小学校にいた。（長崎歴史文化協会会員）

「皆さんも御承知の通り、長崎の新地街と言ふ處は、維新の頃から、渡来した幾千の支那人が集つて、大きな一つの廓を拵へている。その廓へ、一足を踏み入れると、遠い支那と言う国へ行つたような気持ちがある程の別世界なのです。土地の人も、旅人も、流石に此の廓へ出かけることを避ける位、長崎という寂かな、おっとりとした町の、而も殆ど真中に……」

という書き出しから次第に黄夫人が起す殺人事件へ話は進んで行く。小説の中に出てくる、寺町の裏手に住んでいる中学生の藤三という少年が級友の唐菜と遭遇して、その数奇な運命を知り、彼の伯父隆泰が黄夫人の手で扼殺されるまでのいきさつを物語る怪奇小説で、既に処刑された黄夫人の手が、日本に渡り、隆泰と何らかのつながりを持つ人間に爪跡を残すという物語りの不気味な小説である。この小説が世に出た大正十三年の五月は、奇しくも私が生まれた年月と同じであつたので、物珍しい関心もてつだつて面白く読んだ。

この「黄夫人の手」は、昭和四年九月大阪屋書店から上梓した「趣味綺談燈を消すな」の中・短篇集八篇の中に収められたもので、「六神丸奇譚」・「葵花紅娘記」・「父と母との輪廓」・「心癡狂」・「幽鬼樓」・「黄夫人の手」・「大狂痴」・「人間料理」の八篇である。

黒石が記したその巻頭小序には、「支那人の中には創作探偵怪奇小説より遙かに幻怪奇異なる物語となるものが夥しくあることを知るところ、私は、その彼等の人生を内外から眺めて来た。そうして得たところの見聞を書いて来た。本書に採録する数篇の長短の物語は斯かる見聞期、則ち日本に於ける支那人と支那に於ける日本人の生活記録である」と本書成立の因を記している。

「六神丸奇譚」は、贗薬売りと誘拐とをおりこんだ探偵小説であり、「葵花紅娘記」は「六神丸奇譚」同様、長崎を背景として、博士が青島で手術のために、小指を切り落とした娘の死体が流れつくという怪奇小説で、

### 風信

○もう、あと十日もすれば十二月である。月日の経つのは早いものですな。

○長崎の食文化を研究したいと言うので最近はお訪者が多い。一昨日は江戸時代「長崎で有名な料理は何んでしたか」との質問があつた。私は天明五年（一七八五）京都器土堂主人が編集した「萬宝料理私伝書」を見せて、料理名に長崎がついたものを次のようにあげて説明した。「長崎田がく、長崎鳥のとろろ、長崎スヘイ、長崎玉子飛龍頭、金米糖たまご、酒かけ牡丹たまご、長崎卵すし、長崎油餅、長崎後藤流甘露たまご、家主貞良」この本には其の製法も記してあつた。

○料理と言えば、最近長崎では「シュガーロード長崎」という言葉を良く宣伝されているが私の所にも今年の春頃より東京八坂書房より「砂糖の文化誌」を伊藤汎博士監修で川北大阪大教授・小川農学博士等、歴史・食文化・農業・科学各界の専門家の論文を集め発刊するので、私にも「近世日本本の砂糖貿易」について執筆せよとの依頼があつた。この本は年末に発刊されるとの事。長崎のシュガー研究に関心を持たれる方がおられたら一読されておかれたらと考えている。

○市川森一先生より二〇〇六年五月以来長崎新聞に掲載されてきた「蝶々さん」が完結したので二冊にまとめ講談社より出版したと言われて御恵送くださった。明治の長崎を舞台に、ひたむきに未来を信じて生きてきた「蝶々さん」の物語である。何か私にも胸にせまってくるものを大きく感じました。有難うございました。（上・下各一、五〇〇円）

○私ごとですが、昭和五十三年春出版しました「長崎ひとり歩き」、現在の「長崎さるく」の原点という本で各方面より再版が進められ、今月「ナガサキ市民出版会」より発刊された由連絡をうけました。各書店にもあると思いますが当事務所にも置いております。（一、五〇〇円）

○十八銀行発刊の「ながさき経済・11月」の月次県内経済概況に曰く、「生産面は堅調ながら、総じて悪化傾向」と論評しておられる。然し造船方面は高操業続く。重電機械・電子部品は概ね高水準とあり一安心。悪い所は大型店販売・乗用車販売台数ともに前年割れと記してあつた。次に県の地産に対する指導方針としては、以西曳網漁の再生、マグロ養殖の状況が報告されていた。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 2F

